



第一回 看護師さんに感謝をこめて

生誕二〇〇年「ナイチンゲール」物語

講談師 一龍斎貞花

新型コロナウイルスにより、医療従事者への偏見、差別が行われていることは実に嘆かわしい。

日本看護協会福井トシ子会長は、看護師の子どもは保育園から来ないではない。タクシーの運転手から看護師は乗らないでくれ。子どもが学校でいじめられたと、語られている。

コロナ患者に接する都立病院看護師への危険手当一日340円、医師ゼロもあった。患者に接しない厚生労働省の職員がコロナ対策に従事すると一日最高4千円。その後やっと医師、看護師に危険手当20万円とか。労災も認められるようになった。

欧米では、決まった時間に医療従事者に感謝の拍手をする。

日本でも、感染から退院した人が、感謝の言葉を述べ、敬意や感謝を表す航空

自衛隊ブルーインパルス。これに対し、税金の無駄遣い、騒音の批判があった。何故素直に受け取れないのか。不透明な給付金事業への巨額委託費よりずっと意義があるのに。

花火大会が中止になり、163社の花火会社が全国一斉に悪疫退散と医療従事者への感謝の花火打ち上げは、実に粹な催しでした。

看護師さんに感謝をこめて、生誕二〇〇年、白衣の天使ナイチンゲールを書かせて頂きます。

フローレンス・ナイチンゲールは、一八二〇年五月十二日、イタリアのフロレンスで生まれました。十一代家斉の文政三年です。

父は、イギリスの大地主で貴族という

裕福な家庭で、両親が三年間にわたる新婚旅行の途中、イタリアで次女として生まれ、花の都という意味のあるフロレンスと名付けられました。

講談師が、何故ナイチンゲールかと思われる方もあるかと思いますが、看護師の会で、各地で何度も口演させて頂いています。看護学会でも講演させて頂いています。

子どもの頃から小鳥や動物を可愛がり、こわれた人形には話しかけながら包帯をしてやるという、優しい心の持主。

九歳の時、父エドワードがハンプシャーの知事に就任、貧しい人々の生活が楽になるよう心をくだき、子どもたちの教育のために小学校へ多額の寄付をしたり、授業料の払えない家の子供に授業料を出してやるなど素晴らしい知事。

母のフランシスも慈善事業に精を出し、病気で苦しんでいる人がいればすぐに薬や食べ物を持つて駆けつけ、貧しい人がいれば贈り物をする。

フローレンスも、姉のパーセノピーと共に、母についてお見舞いに行き、やがて一人でお見舞いに行くようになり、村人たちは心から感謝していました。

一八三七年の冬は、寒さが厳しく村中に風邪がはやり、十七歳のフローレンスは相変わらず病人の家を見舞っていました。姉が風邪を引き、家族から使用人にも次々とうつり、フローレンスも高い熱を出して寝込んでしまった。ひどい熱とせきのため食事ものどを通りません。そんな苦しみの中でも、村の病人のことが心にかかり、

「みんなどうしているかしら。早く良くなってお見舞いに行きたい。神様、ど



うぞ可哀想な村の人たちを助けて下さい。あの人たちの病気を治してあげて下さい」

ふらふらする身体で一心に祈りました。するとどこからか、

「フローレンスよ」

「アツ誰？」

「フローレンスよ、貴女が正しいと思う道を進みなさい。迷ってはいけません。貴女の進む先に仕事が待っているのです」

「神様のお声だわ。神様が私に正しく生きることをすすめて下さった。私の弱い心を力づけて下さったのだ」

その日の日記に、「一八三七年二月七日、神様が私を力づけて下さった」と書いています。

翌年ナイチンゲール一家は、二年間ものヨーロッパ旅行。行く先々で毎晩のように華やかな舞踏会やパーティーが開かれ、美しく聡明に成長したフローレンスは、たちまち社交界の人気者となり、政財界の人たちと交友関係を作り上げていきましました。

しかし夜ベッドに入ると、

「パリの毎日は本当に楽しいわ。でも私ばかりこんなに楽しくていいのかし

ら。世の中には困っている人たち、病気で苦しんでいる人が一杯いるわ」
こうした気持ちがどんどんつのつていき、二十五歳の時、

「お願いがあります。ソールスベリーの病院へ行って看護法を習いたいのです」

「病院へ行きたいというのは本当か。病院がどんなところだかよく分かっているだろうね」

両親ばかりか姉も、
「妹が看護師になるなんて、あたしは嫌よ」と大反対。

その頃の病院は衛生設備が整っていない上、看護師になっているのは身寄りのないおばさんか、他に仕事に就けない女の人たちの仕事で、最低の仕事とされ、おまけにイギリスでは、女性が外で働くことは恥ずかしいこととされていた。

家族の反対でソールスベリー行きはあきらめたものの、看護師になりたいという望みは捨てず、いろいろの病院の本を集めて徹夜もするなど、独学で二年間の勉強。

看護への道

二十七歳の時、相思相愛のリチャード

からプロポーズされ、両親もしきりに結婚を勧めましたが、看護の仕事をしたいという気持ちは動きません。

人々に奉仕する仕事をしたいというフローレンスの考えを知っている、大臣のシドニーハーバートから、ロンドンの貧民学校の子どもの世話に来てほしいという依頼が。

「シドニー大臣からの依頼か。それじゃ仕方がない。行ってきなさい」

フローレンスは、顔色の悪いボロボロの服を着た子供たちに囲まれながら、生き生きとして働き、暇を見つけてはロンドンの病院を見て廻り、

「病院をもっと清潔にしなければいけないわ。病人を世話する人も年取つてよく働けないおばさんの代わりに、若い女性が優しくお世話をすれば、病人も気持ちが悪くお世話をすれば、病人も気持ち悪く落ちていて重い病気も、早く治るに違いない」

まもなく貧民学校が廃校となり、ドイツのキリスト教の病院を訪れると、この病院を開いたフリードネル牧師が、
「よく来て下さいました。病院や孤児院もご案内しましょう」

「部屋はきれいに掃除が行き届き、ベッドのシーツも真っ白、看護師の就業規則

もきちんと決められていて、皆きびきびと働いている。病院はこうでなければいけないんですね」

「そうです。病人には新しい空気と太陽の光が一番必要です」

牧師のこの言葉に、自分の考えは間違っていないことに自信を深め、夜は孤児院で眠り、看護師と同じ物を食べ、病院の規則や看護の仕方を三カ月間学んだのでございました。

英語の他、フランス語、ギリシャ語、イタリア語、ラテン語、哲学、数学、経済学、美術、音楽、天文学など、さまざまな学問も学び、三十三歳の時、ロンドンの下町に、働く女性のための慈善病院が出来、その監督の仕事をする人を求めていた。

「お父様、お母様、私はこの仕事に一生を捧げたいと思います。お許しください」
「そうか、それほど気持ちなら……。世の中の役に立つ仕事です、頑張るんだよ」

次回は、クリミアでのランプの天使と呼ばれる働きを申し上げます。